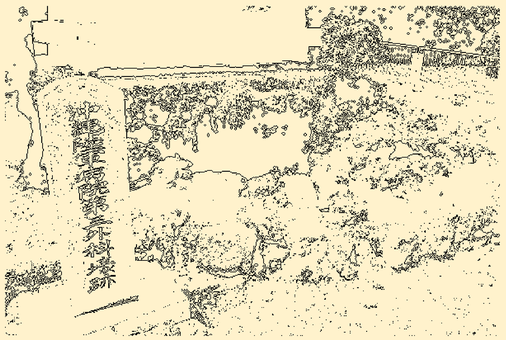
看護者のメンタルヘルスからみたひめゆり学徒隊についての文献検討

191052　宮崎奈月
191055　山本真生
指導教員　升田由美子



研究背景

第二次世界大戦の沖縄戦（1945年）について

- 太平洋戦争末期、米軍に追い詰められた日本軍は、日本本土の決戦に備えた『時間稼ぎ』として、沖縄への米軍の無血上陸を許した。約三ヶ月にわたる初めての国内戦であった
- 住民の戦没者数は、軍人をはるかに上回る約16万人となった
- 看護師だけでなく看護学徒隊として、沖縄の高校生や師範学校の女子生徒が招集され、戦場で看護活動を行った
- 動員された学徒隊の中で最も動員数が多かったのがひめゆり学徒隊である

研究目的

- ひめゆり学徒隊をとりまく状況や環境について把握する。
- 学徒たちがどのようなメンタルヘルスで看護活動を行っていたのか検討する。

研究意義

- ひめゆり学徒隊の看護活動は、現代と環境が大きく異なるが、看護をする者の葛藤など心理的な部分で現代に繋がるものがあるのではないかと考えたため。
- 戦争を振り返り、当時の劣悪な環境や多くの命が犠牲になった事実をうけとめ、伝えることが必要だと考えたため。

方法

●用語の操作的定義

メンタルヘルス：WHO（世界保健機関）の定義を参考にし、かつ戦時下である特殊性を考慮し、本研究では「精神状態」を示す総称とする

●研究対象

第二次世界大戦の沖縄戦の看護活動を対象とした書籍のうち入手可能なものを対象とした文献検討を行った。ひめゆり平和祈念資料館に問い合わせし、紹介を受けた文献のうち、4冊の文献を対象文献とした。調査期間は令和4年4月～12月である。

方法

●分析方法

グレッグ美鈴ら（2016）による質的研究の手法を参考にした質的記述的方法とした。ひめゆり学徒隊を取り巻く当時の状況や環境（A）、戦時下特有の学徒たちの精神状態（B）、学徒たちの率直な思い（C）を捉えている中心的な記述をコード化した。

さらに、内容の類似性に従いサブカテゴリ化、さらに抽象化しカテゴリ化した。分析の過程では、２名の研究者が対象文献をそれぞれ熟読し、それぞれがコード化した後、研究者間で確認しながら分析を行い、妥当性・確実性・信頼性の確保に努めた。分析は指導教員の指導を受けながら行った。

方法

●倫理的配慮

文献を引用する場合は、出典を明示する。本研究は先行研究に基づく研究であり、著作権の範囲内で複写を行い、出所を明示し、その引用の方法に留意し、論文中の表記方法に従う。

●対象文献

①伊波園子（1992）：ひめゆりの沖縄戦，岩波ジュニア新書，岩波書店.
②仲宗根政善（1989）：ひめゆりの塔を巡る人々の手記，角川文庫，角川学芸出版.
③宮城喜久子（1995）：ひめゆりの少女，高文研.
④宮良ルリ（1986）：私のひめゆり戦記，二ライ社.

結果

ひめゆり学徒隊を取り巻く当時の状況や環境（A）
⇒366のコードから170のコードを集約し、40のサブカテゴリ、6のカテゴリを抽出（表1）

戦時下特有の学徒たちの精神状態（B）
⇒115のコード、53のサブカテゴリ、9のカテゴリを抽出（表2）

学徒たちの率直な思い（C）
⇒98のコード、34のサブカテゴリ、9のカテゴリを抽出（表3）

考察①　生活や看護における環境の重要性

●戦時下の病院壕内の様子：【看護活動の状況】【水に対する学徒の思い】

- 換気がされず、太陽光が入らない真っ暗な劣悪な環境
- 衛生材料不足
- 医療者の人手不足

傷病兵に充分な治療を施せなかった

※ナイチンゲール（1860/2011）は「新鮮な空気について病人が求める二番目のものは、陽光をおいてほかにはないということである。すなわち、病人を最も害する部屋は、閉め切りの部屋について暗い部屋なのである」と述べている

⇒学徒は〈劣悪な環境と不眠不休の看護活動の中での疲労〉が蓄積されていったが、傷病兵への看護を続け、傷病兵に対して様々な思いを抱いた。

⇒また、分析の過程で「水」に関するコードが多く出ており、看護をする上でも生きる上でも水へのありがたみや貴重さを大いに感じていた。

〈患者数の増加に伴う学徒の負担増加〉【看護活動の状況】
・一病棟百名の患者を、一人の看護婦と四、五名の生徒が昼夜交替の看護で受け持ったがとうてい手がまわらず、便器も不足でカン詰カンでまにあわせた。（③-79-6）

〈患者の配置と看護師の割り当て〉【看護活動の状況】
・二十四時間の交替勤務が場合によって三十時間、三十六時間に延長することか多く、食事の時間もなく、やっとおにぎりにありついたときには、もう飯が腐っていたこともあった。（③-74-14）

〈不衛生で窮屈な壕内につくられた病院〉【看護活動の状況】
・壕の中は、血や膿、小便や大便、さらに汗臭い垢だらけのからだの臭いなどが、気分が悪くなるほど充満していた。また、壕の中は何も見えないほど暗いが、目が慣れると土間の様子がうかがえた。（④-87-5）

〈水があることへのありがたさ〉【水に対する学徒の思い】
・このあたりに泉があると違いないと見当をつけ探すと泉を見つけ、何度も手ですくって水を飲んだ。「ああもう死んでもよい」と思った。（③-351-６）

考察①　生活や看護における環境の重要性

●戦時下の病院壕内の様子：【看護活動の状況】【水に対する学徒の思い】

- 換気がされず、太陽光が入らない真っ暗な劣悪な環境
- 衛生材料不足
- 医療者の人手不足

傷病兵に充分な治療を施せなかった

※ナイチンゲール（1860/2011）は「新鮮な空気について病人が求める二番目のものは、陽光をおいてほかにはないということである。すなわち、病人を最も害する部屋は、閉め切りの部屋について暗い部屋なのである」と述べている

⇒学徒は〈劣悪な環境と不眠不休の看護活動の中での疲労〉が蓄積されていったが、傷病兵への看護を続け、傷病兵に対して様々な思いを抱いた。

⇒また、分析の過程で「水」に関するコードが多く出ており、看護をする上でも生きる上でも水へのありがたみや貴重さを大いに感じていた。

〈負傷兵の悲惨な状態〉【看護活動の状況】
・肩から指先まで石膏で巻かれている人、気管をやられて絶えずピーピーとのどを鳴らし ている人、胸部を貫通されて、呼吸したり話したりするたびに背中の傷穴からジュージューと泡の出る人、脳症をおこしてわめきちらす人、破傷風熱でうんうんうなっている人など、あふれるほどの患者が横たわっています。うす暗い壕のなかで、なにか身の毛のよだつ思いがしました。（①－50－2）

〈傷病兵の期待に応えられない無力感〉【傷病兵の看護の中での思い】
・新患者ほど傷の痛さに無理を通そうとする。毎日ねだられ、返事をするのに胸が詰まり、「なんのための看護婦だ、君らも傷ついてみよ」と言われた時は苦しく悲しかった。しかし、涙をこらえ、自分はどうでもいいのだと思い学友のみで励まし合って泣いた。（③－66－9）

〈治療・看護処置を行うことへの恐怖〉【傷病兵の看護の中での思い】
・はれあがったくるぶしに局部注射をするように命令されたが、大きな注射器の針を垂直に突き刺す注射のあまりの恐ろしさに、このときばかりは泣いて断わった。（②－61－1）

考察②　学徒たちの精神状態の変化

動員当初	〈戦争への実感が湧いていない様子〉でありながらも、看護学徒として〈国へ奉仕することへの使命感〉があった
部隊解散命令後	【敵の攻撃とそれによる被害】を受け続け、学徒たちは【戦時下における感情の喪失、精神の崩壊】を生じていた しかし、【戦時下における生への執着、生存欲求】もあり【軍国主義による精神状態】に支配されながらも死に対する思いに葛藤があったと考える
米軍の保護前後	【軍国主義と国の戦争方針】に憤りと疑問を感じる一方で〈保護した市民への米軍の対応〉が自分たちが抱いていたイメージと違うことに衝撃を受け、憎い感情が無くなっていき、【味方兵と敵兵に対する学徒の思い】が変化していく。

〈戦争を実感できない中での学徒としての誇り〉【動員前の看護学徒の精神状態】
・学生の仕事は当番制に従い、病院壕での将兵の看護、食料の運搬、壕の拡張作業などがあった。呑気さの中、命令下では一糸乱れぬ行動をすることを、著者たちは学徒の誇りとしていた。（①－44－11）

〈生きている人間としての感情の喪失〉【戦時下における感情の喪失、精神の崩壊】
・ウジには悩まされたが、死体の間で寝起きしていても怖いという気持は起こってこず、全く私たちはは感情のない生きた屍同然であった。（③－393－5）

〈無事に一日を生き延びたことのいとおしみ〉【戦時下における生への執着、生存欲求】
・"死は時間の問題"と思いながらも、一日一日と生きのびたことを喜び、「ああ、今日も無事であった……」と、奇しくもながらえた生命を、心からいとおしんだ。（③－214－2）

〈敵に対する学徒の思い〉【味方兵と敵兵に対する学徒の思い】
・（住民に優しく振る舞っている米兵をみて）これが鬼畜米兵か……。と先入観が頭の中でぐらついたが、『偽善だ。勝者が敗者に対する優越感からくる見せびらかしである」とすぐまた否定した。（③－298－２）

考察③　軍国主義教育の恐ろしさ

●戦争の体験者は、
〈戦後に感じた無知だったことへの悔しさ〉と共に教育の恐ろしさを語っている
⇒学徒たちのメンタルヘルスに大きな影響を与えていたのは、当時の**軍国主義教育**だったと考える

当時の軍国主義教育とは？
・国の方針に背いた行動（疎開など）をすると非国民とレッテルをはられる
・お国のために死ぬ、尽くすのは当然である
・国へ奉仕することが名誉
・敵（米軍）を非人間とみる思想
・すでに勝利したかのような情報操作をして日本国民を騙す
⇒ 国家の力、社会の力、 教育の力によって、人間の生き方がただ一つの方向に統制された時代

考察④　現代の看護と通底する点

看護学徒の思い
・〈傷病兵を看護することの喜び〉
・〈傷病兵を治したいという固い気持ち〉
・〈患者の言葉に勇気をもらう〉
⇒看護の喜びや誇りを感じ、やりがいを実感している
・最期に水を飲みたがっていた傷病兵に対し水を与えられなかった経験を悔やむ
・看護したい気持ちがあるものの、自分の看護技術の未熟さや多忙さによって〈傷病兵の期待に応えられない無力感〉を感じた
⇒看護者としての葛藤は現代も生じる葛藤といえる

現代の看護と通底している

まとめ

川原（2022）は、「体験者の語りを通じて私たちが得ていたものは、おそらく起こった事実についての知識だけではなく、かれらの怒りや悲しみ、苦しみであり、平和への強い願いであった。それらを損なわないように、語りを未来に引継ぎ、伝承していくことができるのだろうか」と述べている。

⇒事実の伝承だけでなく、本研究を通した戦争体験者の精神状態や率直な思いにも焦点を当てることで、かれらの思いや平和への願いを未来へ引き継ぐことにつながると考える。

⇒そして、戦争という悲惨な出来事を二度と繰り返さないようにすることが、私たちの果たすべき役割だと考える。

謝辞

本研究にあたって、多くの文献を紹介・ご協力いただきましたひめゆり平和祈念資料館の方々に深く感謝申し上げます。

ご清聴ありがとうございました